

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第四部

第二十四章

tumuzikaze hutatabi

峯村 明

リ・コンストラクション

登場人物

24・tumuzikaze hutatabi

242.

243.

244.

245.

246.

247.

248.

あとがき

奥付

登場人物

桧山 健	H&L 財団・財務部門勤務
〃 ひろ	健の妻
〃 真	健・ひろ夫妻の息子
サーディク	エドミールのステージネーム
河合ヤスオ	H&L 財団・スポーツ部門で修行中の学生
ウィンディ・サトウ	H&L 財団・法律部門で働く職員
A. ドストエフスカヤ	H&L 財団・法律部門の責任者
D. ウィリアムス	H&L 財団・健の前任者

242.

さて。

デビッド・ウィリアムス氏が彼の法律事務所で働いていた女性のことをすっかり忘れていた、わけがない。彼女は仕事はできるがかなり印象的な問題児(?)だったから。出向の形で財団の仕事をしていたので彼女と顔を合わせる機会はほとんどなかったが、んなもの、リストを一瞥すればすぐにわかるはずである。この人は元の雇用主だと。

ならば、ひとこと挨拶くらいあってもよさそうなもんだとデビッド氏は考えていたが、結局それはなかった。ウィンディ・サトウは実に堂々とした態度で法律部門で働いていた。過去のことは彼女の中ではなかったことになっているか、『よさそうなもんだ』と考えている自分の方がおかしいのかとデビッド氏はちょっと悩んだ。

悩んだ末に、ウィンディが働く法律部門の責任者、アレクサンドラ・ドストエフスカヤにそれとなく当たってみることにした。「彼女の仕事ぶりはどんなもんか」と。

「ウィンディ・サトウ？ 仕事はちゃんとしてますよ」、とアレクサンドラ。青灰色の澄んだ瞳を向けられてデビッド氏はつい背筋を伸ばす。ウィンディとは同じ女性なのに、この圧倒的な目の力とオーラはいったい何なのだろう。いや、同じではない。違う生き物なのだ。「彼女がなにか？」と彼女は微笑んだ。これまた心を驚づかみにされるような微笑である。

幸い、部屋にはほかに誰もいない。デビッドは、打ち明けてしまえ、と決心した。実は彼女、以前うちの法律事務所で働いていたことがあるのですよ、と。

アレクサンドラは微笑んだまましばらくデビッドを見、それからおもむろにパソコンのキーをいくつか押し、現れた画面にじっと目を当てた。

「ウィリアムスさん」

「はい？」

「ご覧になります？ ウィンディ・サトウの履歴書。オーストラリアの学校を卒業したあと、ニュージーランドで五年、モナコで二年ほど働いたことになってますが」

「見てください——おお——本当だ」

アデレードのウィリアムス法律事務所で働いた経歴はない。

けれども添付写真はデビッドが知ってるウィンディだ。かつてはメイクをしっかりとっていて栗毛をくるくるさせていた。

そういえば……服装もメイクもより派手になりだしたのは、桧山健がアデレードへ帰ってきたころのことだった。しだいに派手さに拍車がかかり、勤務中にも香りの強い香水を使うようになり、あっという間に事務所を辞めてしまったんだった。事務所の外で健に執拗に食い下がっていたさまが目に浮かぶ。

じっさいは当時の所長だったデビッドの父が情け容赦のない引導を渡した。クライアントとトラブルを起こす職員は要らん、という理由で。

今は直毛のショートカットでノーメイクに近く——ずっと純朴で、真面目な感じがする。

デビッドの脳裏を(別人?)の言葉がよぎった。同姓同名なだけで、別人かもしれない。アレクサンドラも控えめに同じことを言った。

しかし、ひとりの人間が醸し出す雰囲気というのはそうそう変わるものではない。言葉使い、物言い、手振り身振り、歩き方、書類を見る時の首の傾げ方、遠目にではあるがそれらを観察して、あのウィンディだとデビッドは確信を持ったのである。ヘアスタイルやメイクの相違の問題じゃあ、ないのだ。

それとも、単に履歴書に書きたくなかっただけかもしれない。

いやいや、それにしたって、この写真は彼が知ってるウィンディじゃないか。

考えれば考えるほどこんがらかってくる。

(なんなんだ??)

腕を組んで顔全体に不審の色。

243.

アレクサンドラはそんなデビッドをしばらく観察し、おもむろに口を開く。

「経歴を詐称しているのではないかとお疑いですね？」

「ええ。まあ」

「彼女、わたくしのところではちゃんとしてますし、今のところ問題はございません。こうしてはどうでしょう。しばらく様子をみる」

「はあ。いや、しかし……」

デビッドは心配していた。法律部門からの情報の漏洩などという、ひじょうにまずい問題に発展しかねない。

「ごもっともです、ウィリアムスさん。わたくしがすぐに手を打ちますから、ご心配は無用です。お茶をいかが？」

いいながらアレクサンドラは椅子から立ち上がった。じつに堂々としている。肥満しているというのではなく、風格がある。同じ堂々でもウィンディとは次元が違う。

しばらく雑談をしデビッドを安心させ、彼が仕事場へ戻って行くのを見送ってから彼女は送話機をとり、ラウレンス代表を呼び出した。

それが五年前のことだ。ウィンディ・サトウという女性職員はそこからすでに秘密裡に監視下にあった。やがて桧山健の着任が決まり、ウィンディがかつて彼の顧問弁護士をしていたという情報を持っていた関係者は彼女の動向を注意深く観察していた。ようするに、ウィンディは財団の中で五年に渡って泳がされていたのである。

244.

健は法律部門にウィンディ・サトウなる職員がいることを事前に知らされていた。デビッドと仕事の引継ぎをしなければならなかったから。それで挨拶に出向くと、ウィンディは目をぱちぱちさせ

て「はじめまして」と言った。健は「ん？」と笑顔を作る。「あなたと同じ名前の弁護士をしているんだが？」

すると、彼女はきょとんとして、「人違いではありませんか？」、と言う。

「人違い？ え？ あなたはどちらの出身？」

「シドニーです、オーストラリアの」

「ぼくが知ってるウィンディ・サトウもシドニー出身だった」

「まあ！ なんてことでしょう！」両手の平を頬にあててびっくりしている。「シドニー出身のウィンディがふたりいるのかしら！」

「ああ……そういうことなのかな」、と健は深追いしなかった。もしかしたら本当にそうなのかもしれないし。

「あの、そのネコちゃんたちは——」

「ドストエフスカヤ先生がネコ好きだと聞いたのでプレゼントしたくて連れてきた。名前はバラムとバランケ。あなたはネコ、嫌いですか？」

「いえ、そんなことはありませんけど、ペットを飼ったことがないもので」

二匹のネコはその辺を歩きまわり、ひとつの椅子の上へ、次々と飛び乗った。ドストエフスカヤ先生の席である。ウィンディはその様子を見ていたが、いっしゅん口を"へ"の字に曲げた。それは健の知っている表情だった。彼女は不満を抱いている。

バラムとバランケはドストエフスカヤ先生の依頼があって連れてきた。まだアデレードにいた頃、電話がかかって来て、ぜひ譲ってほしいと言うのだった。事情はその時に説明された。それとなく。

「ケン、あなたにとって好ましくない職場かもしれないわ。彼らはきっと役にたつから、ぜひ連れてきてちょうだい」

飼い主のアイラは「二匹とも？ 連れてっちゃうの！？」と、驚き悲しんだが、どうにかこうにか説得した。「彼らはとくべつの魂を持ってるんだ。その魂は昔ある人に仕えていた。その人がぜひにと熱望している。バラムたちもその人と暮らすことは比類ない幸せなんだよ」

あのコたちが幸せならば、とアイラは泣く泣く納得し、じっさい彼らには思いがけない幸せな日々がやってくることになった。

河合ヤスオもまた、ブリュッセルへやって来た時に、法律部門の女性職員ウィンディには気をつけるよう、ラウレンス氏からそれとなく注意されていた。

(？ 何を気をつけりゃいいんで？ 地味で真面目そうなおねえさんだけど？ ドストエフスカヤ先生の覚えもめでたえようだが？)

だから――

桧山夫人ひろから悩みを打ち明けられたとき、
(おおっ！！)と内心小躍りした。(こ、これかっ！？)

それからひろの話に耳を傾けながらこっそりとボイスレコーダーをオンにした。ひろにはわろいが、こんなわかりやすい証拠はまたとなかった。

ウィンディ・サトウは『あたしねえ、あなたのだんなさまの、顧問弁護士してたことがあるの』から始まって、健の学生時代の素行の数々を披露した。行きつけの店の名前、友人関係、当時の《ミッドランタ》の看板メニュー……などなど。

河合から送られてきた音声ファイルを聞きながら、健はあぜんとした。なんでそんなこと知ってるんだ！？

かなり前のことだから忘れていたこともあるが、言われてみればその通りの数々。幸い、というかなんというか、女性関係は当のウィンディだけだった。

しかし……彼のアデレードでの学生時代のことはひろはほとんど知らない。健本人が驚いているんだから、夫以外の女性から滔々とそんな話を聞かされた妻の心理はいかに！！ いいわけがない！！ そのうえ、ウィンディが昔顧問弁護士だったことなど教えてない！！ つまり――

これから起こるひと悶着が目に見えるようだ――

健が頭を抱えていると河合から追伸が。(握り飯うまかった。今度、梅干し入れて (^ω^)/)

245.

本日の仕事は終わったので帰宅しなければならないが、気が重い。法律部門のオフィスへ寄る用事もある、足取りまで重い。後になり先になり、バランケがついてくる。

(それにしたって、いったいどういうつもりだ、ウィンディ・サトウ。どこまでもネコを被るつもりか？ いや、だったらなぜ、ひろにオレのことをあれこれ吹き込む？)

考えに沈みつつオフィスのドアを開けると……

「エ——バ——サーディク！？」とっさに出て来ない。いくつも名前を使うなと言いたい。

「やあ」サーディクは立ったままお茶を片手に、ウィンディ・サトウとなにか話をしていた。ウィンディの頬が緩んでいるのが目の端に映った。

「いいところで会った！ サーディク、今晚時間ある！？」

「え、今晚？ XとYを食事に連れてってやろうと——」

「たまには二人きりにしてやれ！ うちの奥さんがカレーを作っておたくを待ってる！」

「カレー……」

「どうだ！」

「行く」

*

オフィスの外で自宅に電話すると、息子がでた。「真？ 今晚、エドミール先生をお連れするとママに言っという。メニューは何？」

電話の向こうで、真の歓声と、《今夜はカレーだよ》という返事が聞こえた。《朝から約束してたじゃない。聞いてなかったの？》

「聞いてた聞いてた。念のため」ひとまずほっとして電話を切る。

「さっき、ウィンディとなに話してたんだ？」

「ウィンディ？ ああ、彼女ウィンディというのか。なにして、シーフードの旨い店を教えてもらってたんだ。それがなにか？」

「いや、いい、なんでもない。それより——わかったな、強引に誘ってしまっ」

「いやいやいや、アデレードで真を教えているとき、妙にそわそわしていることがあって……晩ごはんがカレーだというんだな。何度かそういうことがあったんだ。ピアノがおろそかになるほど気になるものらしい。私も気になっていたのだ」

真とエドミールがいれば百人力、妙な話にはならないだろう。もっとも、問題を先送りしたにすぎないかもしれないけれど。

246.

なんとなく……妙だなと、エドミールは感じていた。

健も、ひろも、普段通りに見えるのだが、そうふるまっているようにも見える。微妙な緊張を感じる。いつもと変わらないのは真だけだ。こういう不協和音は彼の美的アンテナにしっかり触れてくるのだ。くるのだけれども……ここは料理を絶賛するターンである。

「これは美味だ！ 真がうわの空になるのも無理はない！！」

「今日のはチキンだけど、ビーフ、ポーク、シーフード、野菜だけ、ルウも市販のから自作のまで、レシピは数えきれないほどある。好みで作れるのさ、わりと簡単だから自分で作ってみるといい」

「エドミールさまはご自分で料理なさるの？」

「少しは。Yが料理得意なのだ、こんど作ってもらおう。基本的なレシピ教えて」

「いいですよ」

「たのしみだねー」

「はは、楽しみだ。これ……白ワインもいいが、日本酒も合いそうだな」

どこで覚えたんだろう。健とひろはちらっと眼を見交わした。ちなみに、桧山家に日本酒は置いてない。

「たしかに合いそうだ。言うまでもないが、ビーフカレーには赤ワインだ。そういえばうち、最近チキン料理が多くない？」

「ええ、こどもにお肉食べさせるならチキンがベストなんですって。だから」

「ふーん」

「ねえねえエドミール先生、あのプラン、どうなった？」

「おお、あれか」

「なんのプラン？」

「くにからもうひとり、呼ぼうかと思ってるのだ。Zというんだが」

「ボディーガード？」

「そう」

「XとYじゃあ足りないのか？」

「足りない。バンド組むには四人は欲しい」

「バンド！？」「四人！？」「XとYとZ、それから？」

「忘れてもらっては困る」

「ええっ」

「本気！？」

「慣れない土地で暮らしていると、ストレスがたまるのだ。XとYには少し発散させてやらないと」

「い、いや！ オレはべつにそう意味で言ったんじゃないぞ！！ アレは言葉のアヤだ！！」

「はあ？」「なに言ったのよ」「あ。なんでもありません」

「えーとー、ギターでしょ、ベースでしょ、ドラムにボーカル、先生はどれでもできるんだよね」

「ほかの連中も、どれでもできる。私の身代わりを務められる程度には」

「ええええええ」

「……おたくのボディガードって、ものすごく苦労してないか……？」

「だから少し発散させてやろうと」

「ねえねえエドミール先生！ キーボードはいらないの？」

247.

ブリュッセルは北海道より北にあつて緯度が高い。そのため、白夜とまではいかないが、日没後もなかなか暗くならない。夜十時といえばこどもは寝る時間だが、外はまだほの明るく、エドミール先生が来ていたこともあつて真は寝るどころではなかった。母親に寝るよう促されても聞く耳もたない。

そこでエドミール先生は大げさに驚いた。「おお！ もうこんな時間だ！ おいとませねば！」

「え——もう？ 帰っちゃうの？」「残念だけど、先生たちは明日もお仕事だからね」「真、ママとお見送りしておいで」「パパは洗いものの係だもんね」

居住区は単身者用と家族用と、いづらか離れている。ひろと真はエドミール先生を単身者エリアまで送って行った。

廊下をXが何気なく歩いていたり、彼の部屋の前の廊下で、Yが何気なく壁にもたれている。別のエリアには宿泊施設があって、学生たち、なかにはその保護者も泊まっているが、門限は9時で、そろそろ消灯の時間だ。財団はこういうことにたいへん厳しい。学生たちのざわめきも徐々に収まり、保安部といくつかの部署は一晩中起きているが、建物全体が眠りにつこうとしている。

真は張り切ってお見送りにきたが、昼間のプールで疲れたのか、すぐに眠くなってしまった。「マァ……おんぶう……」と恥も外聞もない。

「しょうがないわねえもお」「重そうだな」「ええ、けっこう」「ははは」

「きみらを見てると、ほっとする。いろいろあるかもしれないが」

「——ええまあ——あります、いろいろ」

「マミヤ」

「はい？」

「なにか——悩んでいないか？」

ひろは思わず長身のエドミールをふり仰いだ。今日、同じことを河合に言われたんだった。

「え——、そんなふうに見えます？」

「いや、なんとなくそんな気がするのだ。ケンのことか？」

いきなり言われて、思わず立ち止まってしまったひろだ。

「話してごらん。だいじょうぶ、真ならぐっすり眠ってる」

＊

なるほど、とエドミールは思った。腑に落ちた感じだった。健が法律部門のオフィスへ来た時、彼はまっさきにエドミールの話相手、つまりウィンディを見たのだ。そしてすぐに目を逸らした。その時、ウィンディが、にっ、とほくそ笑む様子がエドミールの視界に入っていた。

微笑んだのではない。彼女は、嗤ったのだ。

248.

エドミールは黙ってしまい、ひろは気まずくなった。

口に出してみれば自分がしょうもない嫉妬心を抱いていると思えてくる。夫の過去のことなどにもかも知っている必要など、ないではないか。それに、思い出したが、あのウィンディという女性、...風貌は今と違うが...空港でぶつかったことがある。高二の、修学旅行の時だ。あの時、健はウィンディを『連れだ』と言った。あとでどういう関係なのか気になったが、なにか付き合いがあったのはたしかなのだ。

ただ——夫がなぜ知らないふりをしているのか、そこはわからない。

行先のわからない考えを弄んでいると——肩に手を感じた。エドミールの手だ。

「マミヤ。ケンがきみに黙っているのは、なにかわけがあるのだろう。どうしても気になるというなら、思いきって尋ねてみればいい」

「エドミールさま——」

「人の言葉や態度にはいろいろあるが、なかには、ものごとを結びつけるものと、わけ隔てるものがある。融合させる力と分断させる力だ。私は、わけ隔てる言葉に、興味はない」

そう言って、ひろの手を取ろうとしたが、彼女の手は背中の息子を支えてふさがっていた。それで額にかかるく接吻した。

「エドミールさま——」

「送ってくれてありがとう。さ、もう行って。ケンが待ってる。あの角を曲がるまで、ここで見ているから、安心して」

「——ありがとうございます」

「うん。さあ」

ひろはゆっくり後退し踵をかえす。視界が涙で曇っていた。

＊

とりあえず緊張が解けて、健はリビングのソファで大の字になっていた。

(つかれた……)

洗いものは終わったし、持ち帰った仕事もない。あとは真を寝かしつけるだけだ。そしたら……ひろと話そう。例の女のことも包み隠さず。事実を明かせば、ひろはかならずわかってくれる。

エドミールを呼んでよかったと思う。エドミールの魂であるバイスロイは金星神を祖とするが、マミヤは金星神から派遣された女神なのだという。当時の話ではあるが、彼らはそういう関係なのだ。同じものを信じている同士という関係は、メンタルをひじょうに安定させると誰かが言っていた。

(誰だっけ？ マックス・ペイリーだったかな)

ペイリーの顔が浮かんでつい笑ってしまう。笑う余裕がでてきた。

それはともかく、エドミールはひろに対して常にていねいな言葉で話しかけ、ひろも彼に対して敬意をもって接している。それは今も生きている。

よかった。彼が来てくれて。ひろの機嫌が悪くならうはずがない。

気持ちが軽くなり、ふと携帯電話をみると、メールの着信があった。(河合、か……)(おにぎりの具のリクエストかな、こんどはなんだ？)

気持ちが緩んでいたこともあり、なにも考えずにメールを開いた。そこには——妻と男の画像。ひろとエドミール。エドミールがひろの額に接吻している画像。

(——なんなんだ——)

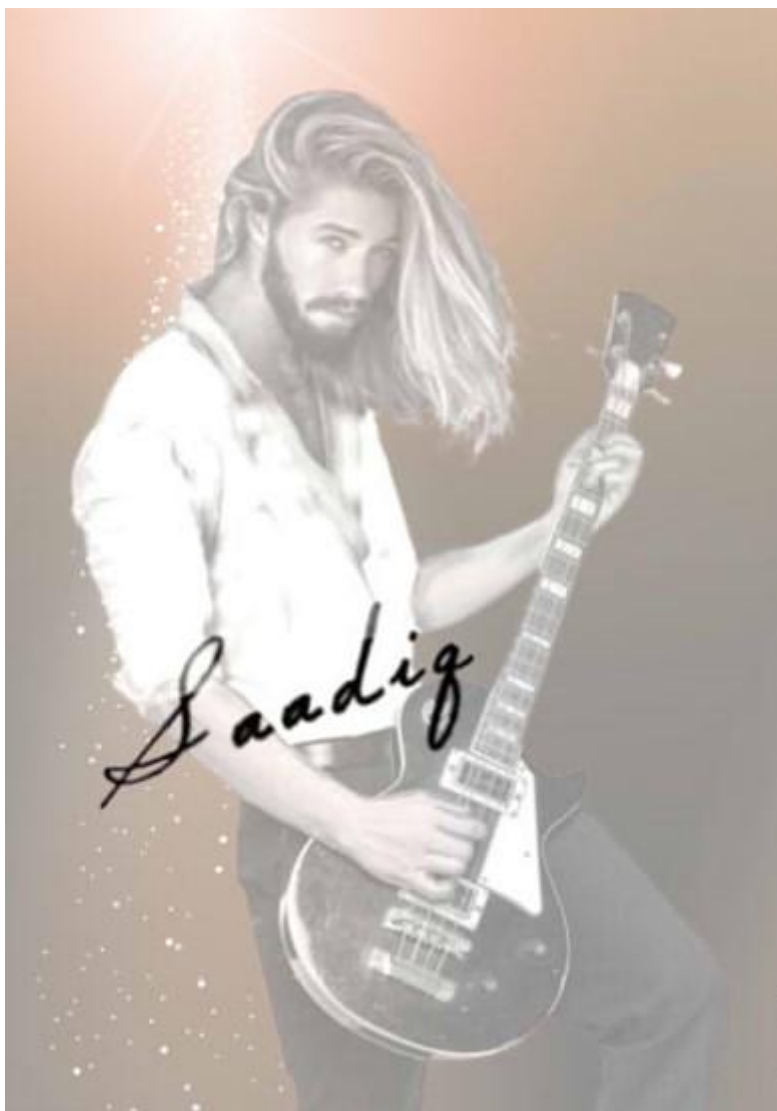
24・「tumuzikaze hutatabi」

25・「」へ続く

あとがき

あとがきが思いつかなくて。

サーディク先生直筆サイン入りポートレートを抽選で十名様にプレゼント
なーんてことになったら楽しいだろーなー



サーディクはアラビア語で『誠実な人』

うちの場合、特定のキャラクターを表紙にするとDL数が減る傾向がありまして怖いんですけど
まあ、ここまで来たことですし、もう、やりたいようにやらせていただこう …強気…

2025年8月6日 記

奥付

リ・コンストラクション

第二十四章 tumuzikaze hutatabi

2025年 8月7日 初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[イラストAC](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社